

日本キリスト教団 清水ヶ丘教会

まじふ

Vol. 12 No. 1  
2015. 5. 3

「それゆえ、こう告げるがよい。『見よ、わたしは彼にわたしの平和の契約を授ける。』」

彼と彼に続く子孫は、永遠の祭司職の契約にあずかる。彼がその神に対する熱情を表し、イスラエルの人々のために、罪の贖いをしたからである。』」

民数記二五：一二〜二三

中島 聡 牧師

《自己紹介の続きです》 私は広島流川教会の後、母教会の大阪西野田教会に遣わされました。この教会は、第二次世界大戦下に宗教弾圧を受け、小出朋治牧師が投獄され、強制解散させられた教会です。この教会において小出朋治牧師の薫陶を受け、献身した小山宗祐伝道師は、一九四二年三月二六日、日本基督教団最初の殉教者となりました。小出牧師は、終戦後も拘留され続け、九月九日、堺刑務所内において、日本基督教団最後の殉教者となりました。一九五六年、私の父がこの教会の復興開拓のために遣わされましたので、子どもの頃からこの話を聞かされ、戦争の悲惨さ、また、平和の大切さを思い知らされました。

《二〇一五年の伝道く平和を求めて②》『ましむず新年号』で記しましたが、「平和の主イエス・キリ

スト」(三テサロニケ二：一六)を頭と仰ぐ教会として、今年の伝道に「平和を求め」ことを示されておりました。大槻邁兄紹介の『日本が世界を救う核をなくすベストシナリオ』(ステイブ・リーパー著)は、実に先見的な著作でした。リーパー氏は、広島平和記念資料館を運営する財団法人広島平和文化センター理事長を一昨年まで務められ、現在はNPT(核不拡散条約)に関する活動を続けておられますが(大槻兄は四月末からNPTに関する国連会議傍聴のためニューヨークに行かれるので報告に期待します)、彼の父親が、一九五四年九月二六日、千五百五十五人の命が失われた洞爺丸海難事故において、ストーン宣教師と共に日本人に救命胴衣を譲って殉教したデイン・リーパー宣教師であるとは主の深い摂理を思わされます。リーパー宣教師は座礁した船の中、手品を披露して皆を落ち着かせ、救命胴衣を着せてまわり、いよいよ沈みゆくとなると、子連れの母親に救命胴衣を譲って殉教したのでした。キリスト者として命をこの上なく尊び、愛し抜く姿を学ばされます。

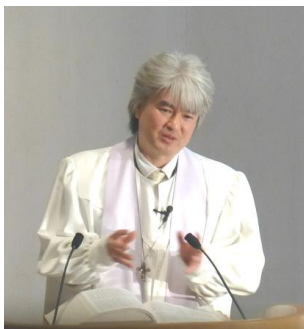
《平和は、主の御教え》今年、壮年会の聖書研究のテーマを委ねていただき、是非、「聖書における主の平和」として、まず旧約聖書から学びを進めていただければと願います。

私たちキリスト者は、聖書における平和、主の御教えとしての平和を祈り求めて参りたいと願います。クリスチャンは世界で一番多く、世界人口の約三割(約二億人)いて、三人に一人はクリスチャンです。しかし、世界の現実には平和からほど遠くあります。

なぜでしょうか。聖書をどのように読んでいくのか、が問われています。

例えば、新共同訳聖書では、民数記二五：一二に、一番最初に「平和」の文字が出てきます。「それゆえ、こう告げるがよい。『見よ、わたしは彼にわたしの平和の契約を授ける。』」(ここには、イスラエルの民の中で異教・偶像崇拜に走る背信者がいたので、彼らを裁くことによってもたらされる「平和」が記されています。これは今から三三三百年程前の出来事ですが、現代において、思想信条、信心をどのように受けとめるのか、大切なテーマだと思います。「お互いの信じるところ、大切にすると」と、私たちの伝道について、じっくり考えてみたいと思います。どうぞ、壮年会へのご参加をお待ちしています。

《隣人を自分のように愛しなさい》さらに、「わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」(マタイ五：四四)とまで言われた平和の主イエス・キリストの御心に辿り着くことができますように。礼拝、祈祷会、各例会、家庭集会を大切に、共に聖書をしつかりと読み、キリストに出会って参りましょう。アーメン!



## 【新任副牧師紹介】

「清水ヶ丘教会に遣わされて」片平 貴宣



皆さん、初めまして。片平貴宣（かたひらたかのぶ）と申します。この度、ホーリネスの群との繋がりと、中島聡先生の推薦で清水ヶ丘教会に遣わされることとなりました。一九八〇年生まれの三五歳で出身は福島県です。今年度より主にあつてよろしくお願ひします。

私が初めて教会へ足を踏み入れたのは、高校一年生の六月、一九九五年のことです。その理由は、キリスト教主義の高校「聖光学院」に入学したからです。しかし始めからその高校に入ろうと思っていたわけではなく、受験の際の都合で仕方なくその高校に入らざるを得なくなったのです。

当時の私は、自分の望んだ道に進めない不満を感じることもありました。けれどもキリスト教主義の高校に入学したことをきっかけに福島新町教会に導かれ、その後の様々な出来事を通して学ばされたの

は、全ての出来事には神さまの導きがある、ということでした。

私の生涯の聖句はローマ八・二八の「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。」です。今まで自分の身に起こった全ての出来事は、私にとつては利益となることも不利益となることもありましたが、そのような「私」の思いを超えて、神さまが最善のご計画を成し遂げてくださると信じさせられております。

清水ヶ丘教会において十分な働きができるか、まだわかりません。はたして自分が何をしたらいいのかもつかめていません。もしかすると皆さんにご迷惑をおかけすることもあるかも知れません。けれども、主の導きに従って日々歩みたいと思います。

そのために心がけたいことが三つあります。これまで遣わされてきた教会でも心がけてきたことでもありますが、まず一つめは、私自身が清水ヶ丘教会を知る、と言うことです。歴史ある教会ですから一朝一夕には行かないでしょうが、主が導いてきてくださったその歩みを少しずつでも知ることが出来ればと思います。また、その主の体に連なっているお一人お一人の兄弟姉妹とも、良き交わりを持つて行ければと思います。

二つめは、地域を知る、と言うことです。どのようなところに教会が建てられているのか、そこに住む人々にどうやって福音を届けていけばよいのか、地理はどうなっているのか等、まだまだわからないことだらけです。この地域に建てられた教会として、地域に向けて証しの業を行っていければ幸いです。

三つめは、喜びある諸集会を形づくる、ということとです。神さまの前において礼拝を守ることは、厳かであると共に喜びが伴います。真の神の言葉を聞き、魂の養いを得られるからです。主にある交わりにおいて私たちは養われ、喜びを持って出で行きましょう。

最後にお願ひしたいことは、山梨八代教会を覚えて祈って欲しい、と言うことです。無牧の間も主の守りがあるように、そして良き牧者が与えられるように、引き続き覚えて祈ってくださると感謝です。